

神獣「白澤」と文化の伝播

熊澤美弓

はじめに

白澤とは、中国発祥の神獣である。資料の多くでは、中国の五帝の一人としてあげられる黄帝との関わりが見られ、黄帝に対して世の中の鬼神に関する知識を授ける存在として出てくる。この黄帝と白澤の伝説を書き留めたもののひとつに『軒轅本紀』という資料がある。『雲笈七籤』所収の『軒轅本紀』の白澤に関する部分には、

帝巡狩東至海登桓山。於海濱得白澤。神獸。能言。達於萬物之情。因問天下鬼神之事。自古精氣爲物遊魂爲變者凡萬一千五百二十種。白澤言之帝令以圖寫。之以示天下。帝乃作祝邪。之文以祝之。

(私に調点を付す。以下、白文資料については同様とする。)

47 とある。つまり、黄帝は東方を視察した際に海浜で神獣白澤を手に入れたが、この白澤は話すことができ、すべてのもの

のの真理に通じていたので、天下の鬼神の事を尋ねたところ、一一五二〇種いるそれらの存在について語り、黄帝はそれを書き写させて天下に示したということである。これが白澤に関する伝説であり、白澤について記述されている資料の多くに同じような内容の記述が見られる。同様に、多くの資料に見られる文章としては、もうひとつ、胡文煥の『山海經圖』^②に、

東望山有澤獸者。一名曰白澤。能言語。王者有德明照幽遠則至。昔黄帝巡狩至東海^①。此獸有言為時除害。

とある。これも、『軒轅本紀』とほぼ同じではあるが、東望山に澤獸または一名を白澤というものがいて、言葉が話すことができ、これは王者の徳が明らかであり、それが遠く遙かに及べば、現れる。昔、黄帝が視察をした際に、東海に至った。この獸の言葉によって、世の中のために妖怪の害を取り除いたという文意である。白澤についての資料の多くにおいて、この二点と同じような記述が見られる。これらの文章からいえることとして、白澤は「萬物之情」に通じる神獸であり、五帝の一人である黄帝に授けることのできるほどの鬼神に関する知識を有していたということが類推される。また、関連して、黄帝は神話の時代存在であることから、その神話に関わる白澤は中国においてはそれほど古くからの存在であると認知されていたのではないかと考える事ができるということ、王に徳があれば現れると考えられていたこと、「時の為に害を除く」という記述から、除災の性格を有していることなどがあげられる。

先行研究について述べると、論文ではないが、江戸時代に屋代弘賢によって書かれた『白沢考』^③『白澤図説』^④は日本と中国の資料についての古今の白澤に関する諸書の記述を抄録するとともに、白澤王についての資料もあげている。白澤王とは、日本において、天皇の住居である御所の中でも、清涼殿鬼の間に描かれていたという絵のことである。本論は、中国・日本・琉球における白澤について述べるため、白澤王については、また稿を改めて考察していきたいと考えているが、白澤と白澤王を関連づける考え方があり、そのため屋代弘賢も白澤王についての記述をも掲載したのである

う。屋代弘賢以降の白澤の研究においても、日本と中国の白澤に関する資料をあげるものが多く、中国・日本・琉球の三国全てを通した白澤に関する論文は未だ確認できていない。

このように先行研究の少ない中で、それでも白澤と銘打った論文はいくつか見つけることができた。和漢の文献を比較した研究としては、原田淑人氏が「猯と白澤と貂澤が同一だとした後、「吾人は、狢犬の狢は即ち貂（貂同じ）にして、亦等しく白澤辟邪獸なるべし」と述べているほか、牛山佳幸氏が長野県戸隠における「女人禁制」と共に、白澤について資料を提示しながら述べている。その中で、氏は、中国の文献から知られる白澤の特徴として、「(1) 姿勢は獅子に似ているが、顔と脇腹にそれぞれ三つづつの合計九つの目と、頭部に二本、背中に四本の合計六本の角を持つ。(2) 人間の言語を良く理解する。(3) 有徳の政治家がある時に出現する」という三点をあげるとともに、日本における白澤や、白澤王についても言及している。なお、この引用部分の(1)に見られる顔や脇腹に目があるという特徴について、中国における白澤の資料では筆者はそのような描かれ方をした白澤を確認できなかった。更に、西岡弘氏も注目すべき検討を行っている。それは、膨大な古今和漢の資料を集めて、中国における白澤を年代順にあげ、ついで日本における白澤を白澤王なども絡めて時代順に述べ、屋代弘賢の『白澤図説』について論じ、長野県戸隠の白澤について述べたものである。

一方、白澤の図像については、立石尚之氏が、日本のものを中心に述べている。ここで氏は、現在知られている白澤の姿について、「①人面牛身の姿をしたもの、そして、猯や麒麟と同様に、②瑞獸・靈獸として描かれたものに、大きく二分できる。」⁽⁸⁾として白澤の図像の分類を行っている。それとともに、白澤と件という人面牛身の存在を絡めて論を進めている。同様に、高藤晴俊氏は、日光東照宮拝殿の杉戸に描かれている白澤について論じている。それによれば、そこに描かれた絵は寛永十三年（一六三六）の大造替時に狩野探幽によって描かれたものであり、昭和二十七年以降から昭和六十二年まで「猯」であるとされてきたが、東照宮の修理に関して書かれた資料には白澤であることが明記されており、誤りであることが判明した、とある。⁽⁹⁾ 残念ながら筆者は資料原本にあたって確認することができなかったが、

両氏の論は白澤と他の幻獣が混同されていたことを示すものである。

また、佐藤文彦氏⁽¹⁰⁾は、琉球の宮廷画家であった城間清豊(自了)が描いた作品の中にある白澤の絵についての考察の中で、中国・日本・琉球の白澤の絵をあげている。論の中心は城間清豊なので、三国の白澤の関係を論じているわけではないが、琉球にある白澤の絵を実際に紹介しているのは、筆者が見た限り、佐藤氏が初めてである。

白澤に関して発見できた論文は以上であるが、これらの人々の研究によって、数多くの貴重な資料が発見され、提示されている。しかし、彼らが利用したもの以外にも資料は確認されており、違った視角からの白澤研究は可能である。先ほども述べたように、白澤を通して中国・日本・琉球三国の繋がりにまたがって考察した研究は未だない。また、白澤は、麒麟や龍といった、同じように中国発祥で周辺に伝播した幻獣とは違い、公に名が知れわたっているわけではない。むしろ、人々にとっては、民間信仰の一端としてとらえられているのではないだろうか。そのことから、白澤の受容や変遷、更にはその文化伝播を見ることによって、人々の生活に則した、より深い意識が垣間見えるように思われる。

また、先行論にも見られるように、白澤単独の研究以外にも、件や貌などといった他の幻獣と同一視されたり、そのような他の幻獣の研究の中で白澤が言及されていることもある。他の幻獣との混同によってどう変化したか、そもそも他の幻獣と何故混同されたのかを考えることによって、そのようなことを行う人々の思想や意識が見えてくるのではないだろうか。本稿の主軸が白澤である以上、他の幻獣について詳しく述べることは今後の研究課題として今回は避けておくが、ここでそのことも示唆しておく。

一 白澤の受容

現在、白澤の資料のあることが確認されている地域は中国と日本と琉球である。ここで、それぞれの地域における白

澤はどのようなものがあるか見ていきたい。

(イ) 中国における白澤

中国における白澤と白澤図の初出は『抱朴子』である。日本の辞書類などを見ると、中国古代の地理書である『山海経』に掲載されているという記述が見られるが、筆者が見た限りにおいて、白澤の記述のある『山海経』を見つけないとがでなかつたため、初出としては『抱朴子』をあげておく。この中の記述として、「窮¹¹神奸¹²則記¹³白澤之辞¹⁴」という記述や、「則論¹⁵百鬼録¹⁶知¹⁷天下鬼之名字¹⁸。及¹⁹白澤圖九鼎記²⁰。則衆鬼自却²¹」という記述が見える。このことから『抱朴子』が書かれる以前から、人々に白澤及び白澤図についての知識があったことや、白澤は既に言葉を話しており、その白澤の言葉を書き留めた白澤図には、鬼が自ら逃げ出すような力があったと考えられる。

中国における白澤は、前述の『軒轅本紀』などに見られる黄帝神話で語られる事がほとんどである。また、白澤についての図版資料は少なく、多くは文章中に見える。他にも、『珍珠船』などに見られる「白澤枕」や『隋唐演義』に見られる「白澤燈」など、実物はわからないが、図版以外にも使用されていることが分かる。文献上の白澤の絵の初出は、『大明会典』¹⁵に、官服の刺繡文様として、麒麟など他の幻獣と共に描かれているのを見ることが出来る。白澤がどのような姿をしているかという記述はほとんど見ることが出来ないが、例えば『事物異名録』¹⁶に「白澤が獅子である」という記述や、『西遊記』¹⁷第八十九回・九十回に「白澤獅」として描かれている。このように、獅子と同一視している書物が見受けられることから、その姿を獅子を連想して描いたのではないかと考える事は十分可能ではないだろうか。また、『三才図会』では「白澤旗」として儀礼に使われている様子が見えるが、その旗に描かれた絵についての記述を見ると、「龍首緑髮戴¹⁸角四足¹⁹」として、獅子とは違った系統の白澤の絵が残されている。このように、図像として描かれている白澤の絵としては、龍のようなものや獅子のようなものなど、パターンはいくつかあるが、総じて獣の姿のみが確認でき、

その系統はいくつかあったのではないかということが考えられる。

なお、牛のイメージの白澤として『天地瑞祥志』に描かれた白澤が見られる。これについて、Donald Harper氏が、「最古の白澤の絵は天地瑞祥志の中に描かれたものであり、その作品は中国から日本にもたらされた」と推定される。この作品は九世紀後半の日本の書誌学のリストにあるが、中国の歴史や書誌学では知られていない。この神は牛の体と頸鬚の顔の人間である。サンクトペテルブルグ (Dh23) にある仏教徒の敦煌文書の中の、九〜十世紀の書物の中では、白澤はウシ属のイメージだと確認された」と述べている。確かに、サンクトペテルブルグ所蔵の敦煌文書の「十吉祥」において、牛が白澤を生むという記述を見ることができる。だが、それだけで白澤が人面牛身で伝わったと考えるのは早計に過ぎはしないだろうか。

氏があげている『天地瑞祥志』は、先行研究²¹によれば、現在、前田育徳会尊経閣文庫所蔵のものが最古の古写本であり、中国においては散逸していると考えられる。土御門家架蔵のものを、加賀藩主前田綱紀の命で書写されたものであり、また、太田晶二郎氏²²によれば、「瑞祥志影本は、字體その他になかなか古様が見られるが、それは影寫の底本が古本を模して寫してあつたのであらう、底本そのものは、江戸時代の新寫だつたのではなからうか、と思ふ。定本の表の「本大切之間、寫留之而已。」(副本を作るの意)云々といふ、書寫に際してのことわり書きの書風が、恐らく江戸時代で、土御門家の人の手になるものと感ぜられるからである。」としており、また、絵についても「展轉模寫のはてにどれほど原の圖様を傳存してゐるか保しがたい」と述べている。筆者もこれに賛同である。前田育徳会尊経閣文庫蔵本が写される以前に日本のもので人面牛身の白澤の絵があることや、中国において、筆者が見た限り、人面牛身で描かれた白澤がこの一例しかないことも理由のひとつである。仮に、中国の絵を忠実に伝えていたものだとすれば、中国資料としてだけではなく、日本における白澤のイメージの元となる資料として、非常に貴重なものであるといえるであろう。

なお、筆者も実際に前田育徳会尊経閣文庫に伺って、実際に資料を閲覧させて頂いたが、人の顔というよりも、正面を向いた獣の顔に感じられた。また、白澤の特徴としてよくあげられる複数の目や頭部の角、宝珠については存在しな

かった。

(口) 日本における白澤

日本の白澤の初出は『延喜式』⁽²³⁾であるが、祥瑞としてあげられたもののひとつとして簡潔に書かれているのみであり、その姿や性格については触れられていない。『延喜式』の後、しばらく時代が空いて、室町期の節用集や『月菴醉醒記』⁽²⁴⁾には、白澤が人面牛身の姿であることや、辟邪や吉祥といった白澤の性格が書かれている。また、真贋の程は不明だが、伝雪舟として、狩野派模本ならびに『白澤考』に人面獸身の白澤を見ることができるとされている。

人面獸身の白澤は、長野県戸隠山の宿坊に保管されている『白澤避怪図』⁽²⁵⁾のような、牛らしき体に人間の頭部が乗った姿で描かれ、一般に広まったものが多い。これは、この姿で描かれた白澤が、『旅行用心集』⁽²⁷⁾に「山中にて狐狸猪狼の類、近付さる方」として「五岳、白沢の両図を懐中すれば、旅中の災難を免れ、悪鬼、猛獸近付ことあたはず」と見られるように、旅の安全の為の護符などに使用されたからであると考えられる。また、『安政千秋頃痢流行記』⁽²⁸⁾には白澤の絵を掲載し、枕元におけば悪い夢を見ず、諸々の邪気を避けるという記述があるが、疫病などが流行した時に、病を避ける護符が民間に流布することは実際にあり、『武江年表』⁽²⁹⁾の中にもコレラ流行の際、これを避ける為のお守として、狩野探幽の戯画百鬼夜行の中から、ぬれ女の図を写して神社姫として流行したものを尊んだものもいたという内容が見られる。ここで、『武江年表』における安政五年（一八五八）七月の記述を見ると、月末頃から、江戸でコレラが流行りだし、八月の始めから、次第に勢が増して、江戸ならびに近在に蔓延ったが、この時、妖孽を払うためとして鎮守祠の神輿や獅子頭を街頭に渡す、村里に齋竹を立てる、軒端に注連や提灯を灯して連ねる、または、路上に三峯山遙拜の小祠を営むもの、節分の夜のように豆をまき、門松を立てるものが現れた。また、厄払の乞丐が現れたり、天狗に教わった疫神を払うまじないだとして、羽団扇に模した八ツ手の葉を軒につるすものがあったりした。このような情

勢の中で、『安政午秋頃痢流行記』の白澤も先ほどあげた「神社姫」のような病避けの護符のひとつとして広まったのではないだろうか。

『十二靈獣図巻』³⁰や『和漢三才圖會』³¹に見られる獣の系統は、葛飾北斎が描いた『北斎漫画』³²の中国伝来の事物が多く描かれる中のものや、中国の鬼神を描いた絵巻物である『怪奇鳥獣図巻』³³のような、中国の資料に関連した作品などに多く見られる。これらことから、白澤は人面獸身と獣の系統に分かれるが、人面獸身の系統の方が護符として多く使用されていたことが分かる。

このように江戸時代に広まりを見せた白澤であるが、明治時代に入ってからその資料の数を減らす。近代化の中で、非科学的とされたものが少しずつ人々の文化の中から失われていったのであろう。しかし、そのような中であっても、日本で白澤が完全に消える事はなかった。明治四十三年に再建された宮城県石巻市鮎川浜にある金華山黄金神社拝殿内には白澤の彫刻が見られる。また、及川窟堂画『白澤図』³⁵の文字部分には、

不悪鬼魔来除火水難

三海経に曰白澤の像あれハ災なくし実なるを白澤は聖人の御代に出て

其正人に似て能物を言ふ身に九の眼有て頭に寶珠を戴き六角在り破軍

星の七星を主る今日本戊夷に当りて守護す七星大明神と申とかや

我を信せは萬の難を救ふ三才図繪に曰白澤出て聖帝ニ申様怪事

あらハ我像を床に懸けて七星を念すべし其福貴目前に来ると言ふ また

男女共に門出の時わか像を放るへからす悪魔恐れ去て近よらず諸

勝負に向て必利有り白澤の勢は破軍の剣先もゆかむとかや依わか朝

第一門出の戈神とす火災を除くに八家のむねに納め置く也水難を除く

事古名張ハ尋て言ふ勇士天竜川の大洪水に六萬騎を引来して平地の如く河を渡して高名せしも兜の内に白澤の像を納め置し嘸や故に黎民の為に世に廣めんことを

と見える。この文章から、文章の差異はあれど、「悪魔恐れ去て近よらず」などの記述に見られるように、白澤が持っていた悪いものを退けるという性質は変わらずに受け継がれていることが分かる。また、このような資料から、宮城や岩手のような江戸から離れた地域まで広まっていたということの証明にもなっているのではないか。昭和に入っても、宮武外骨の『人面類似集』⁽³⁶⁾や、伊藤晴雨の著書『江戸と東京風俗野史』⁽³⁷⁾第五卷信仰と迷信篇にも他書から白澤と文章を引いているのが見える。他にも、岐阜県の内藤記念くすり博物館をはじめ、様々な年代の白澤資料は各地に存在が確認されている。そして、現在も、漫画や小説といった様々な作品の中に取り入れられながら、白澤はひっそりと生き続けている。

(八) 琉球における白澤

琉球の資料は中国や日本に比べて非常に少ない。『歴代宝案』⁽³⁸⁾の記事に中国の皇帝から琉球国王への頒賜品の中に、服に織り込まれた図案として麒麟などともに見られる。『歴代宝案』では単にこのような刺繍がされた服が下賜されたという記述のみだが、その白澤の図案としては『大明会典』が参考にあげられる。それによれば、白澤は麒麟と並んで「公侯駙馬伯」の役職の者が使用することとなっている。これは『使琉球録』に「以麒麟白澤公侯伯駙馬之服」⁽³⁹⁾とあることとも一致する。中国の『大明会典』に描かれている白澤は獣の姿をしていることから、その衣装に刺繍された白澤もおそらくそのような獣の姿をしていたのではないかと考えられる。

また、琉球王朝の宮廷画家であった城間清豊の描いた『白沢之図』⁽⁴⁰⁾も残っている。この作品は沖縄県指定文化財とし

て現在も残っているが、これを見ると人面獸身の系統である。この系統は他にも八重山諸島の測量に訪れたサマラン号の乗員であるエドワード・ベルチャーが著した『Narrative of the voyage of H. M. S. samarang』の「Ox God of Meia-co-shimas」⁽⁴¹⁾に見られる。これと構図や形態がよく似た白澤の絵が、『八重山島蔵元画稿集』⁽⁴²⁾にある。一方、『白澤の図』⁽⁴³⁾において見られる白澤の姿は獸の系統である。これらのことから、琉球にも日本と同じように、獸の系統の白澤と、人面獸身の系統の白澤の両方が混在していたということがいえるのではないだろうか。ただし、琉球に関しては、白澤の資料がこれだけしか見つからないことから、文化として定着はしなかったであろうという推察もできる。

白澤の性格に関してだが、琉球に現存する白澤の資料のうち、城間清豊の『白沢之図』において、絵に添えられている賛として、『涉世録』の文書をあげている。『涉世録』については既に別稿で考察しているため、ここでは詳しくは語らないが、この中で「白澤の図を堂屋の上に掛けておけば、妖怪が災いをなすことはない」と述べられていることから、少なくとも辟邪の性格が伝わっていたと考えられる。

二 白澤の変遷

ここまで、三国それぞれの白澤の受容について見てきたが、ここで、白澤の姿の変遷についても考えてみたい。何故ならば、初めは文章の中に単に白澤という名前が見えているだけだったものが、いつしか絵や文字としても姿の描写をされるようになっていったその描写の変化には、描いた人々の土台となる文化や思想が関係しているのではないかと考えるからである。

まず、白澤の形態は大きく分けると二種類の系統があると考えられる。ひとつは獸の姿をした系統（獸系）、そしてもうひとつは人面獸身（人面系）の系統である。前者の系統としては、『大明会典』【図①】『山海経図』【図②】『今昔



【図②】『山海経圖』

『中國古代版畫叢刊二編』第一輯所収
上海古籍出版社 1994



【図①】『大明会典』卷六十一

江藤広陵古籍刻印社 1989



【図③】『今昔百鬼拾遺』

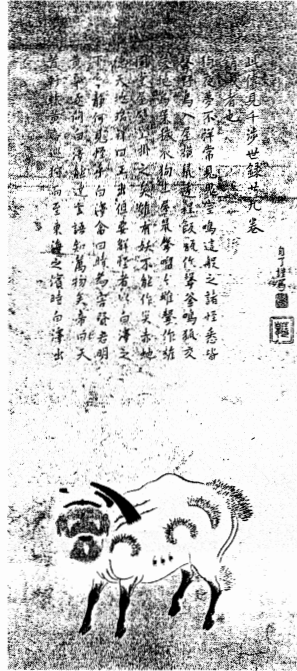
『鳥山石燕画図百鬼夜行』所収
国書刊行会 1997

百鬼拾遺⁴⁶ 【図③】などがあげられ、後者としては長野県戸隠宮本旅館蔵『白澤避怪図』【図④】城間清豊『白澤之図』【図⑤】などがあげられる。これらを見ても分かるように、それぞれの系統の中でも更にいくつかに分かれるが、ここでは大枠でこの二種類に分類した。資料を分類するにあたって、①顔の形態（獣系・人面系）②唇・歯③髭④眉毛の有無⑤耳の形状のうち三つ以上の一致によって判断した。ただし、文章資料の中で姿に関する描写が明記されていないものは排除した。この条件で分類してみたところ、白澤が生み出された中国の資料においては獣系のみであり、日本と琉球においては両者が混在しているという結果がもたらされた。このことから、白澤は、もともと獣系



【図④】『白澤避怪図』

長野県長野市戸隠宝光社
宮本旅館蔵



【図⑤】『白澤之図』

『沖繩文化財百科』第1巻 88頁
那覇出版社 1988

力」として方相の四つ目の威力や饜飩の目の威力についてあげている。また、同論文の中では「何処のいかなる博識家の手になったものか、九目に加ふるに六角人面、いかにも言語をよくする人間らしいことばの呪力と、それを發揮する具としての角が備えられたのである」とし、その九と六の数についても、易と何らかの関係があるのではないかと述べている。ここで、氏によってあげられた「人面」「目」「角」と、一部の白澤の図像の頭頂に掲げられた「宝珠」についてそれぞれ考えていきたい。

の描かれ方をしていたが、それが後々人面系でも描かれるようになったこと、また、人面系でも、角や脇腹についている目など、様々なパーツが付け足されていくことが推測される。更に、中国においては獣系のみであるが、日本と琉球ではどちらもあるということと、日本では人面獣身の白澤についての記述は室町時代の資料があるが、琉球資料では城間清豊の資料までは白澤に関する資料がないことから、白澤は、中国より日本に渡ってから、獣の姿より人面獣身の姿に変容し、なおかつその姿で日本から琉球に入ったのではないだろうかという推論に至った。それでは、何故白澤はその姿を変容させたのだろうか。西岡氏は「神獣白澤考」において「目と言語の威

(イ) 人面

西岡氏が「言語をよくする人間らしい言葉の呪力」と述べられたように、人間のことばをあやつるということが人面に変化した原因のひとつであるという事は否定できない。佐藤健二氏は論文『クダンの誕生―話のイコノロジー・序説―』の註(2)において白澤について触れ、「さて、いつこの人面という表象が、白澤にくわったか。あるいは中国の古典にすでにあった『ことばをしゃべる』という特質の視覚化であろうか」と述べている。また、立石氏は『白澤のすがた』において神農氏をあげ、「白澤がこのように、邪悪なものから身を守るものとされつつも、流行病に対する信仰へ派生していった理由のひとつには、神農とのかかわりを指摘できそうである。神農は、中国古代の伝説的な帝王である。農業をはじめ神農とあがめられ、百草をなめて、製薬をはじめたことから、漢方医の信仰の対象とされている。その姿は、人身牛首の姿をしており、頭には角のようなこぶがある。人面であることや、そのあたまに角のようなものがあること、そして牛の首であるということは、この像が医薬を通じて、白澤になんらかの影響を及ぼしたと考えるがたくはない。更に、古代中国において白澤と出会ったという黄帝は、神農氏の子孫を破って天下を統一したとも伝えられる一方で、神農氏と異母兄弟であるとか、八世の孫とかいわれているのである。薬屋の看板に白澤の彫刻をほどこしたものがあがるが、これもそのためなのであろう」として、白澤との関連を示唆している。確かに、古い資料で明確に記述されていないものの、白澤と医薬の関連はあると考えられているようである。しかし、白澤に関しての記述が見られる書物類において、黄帝との関わりは見られるものの、神農氏との関わりのあるものは筆者の見た範囲においては見られない。ここで牛が出てきたのは日本における多くの絵画資料に人面牛身で描かれているからであろうが、神農氏よりもむしろ、『大方廣佛華嚴經疏演義鈔』、『十吉祥講經文』で「牛生⁴⁶白澤」と見え、同じく『十吉祥講經文』に「託⁴⁷生牛腹⁴⁸向⁴⁹人間」とあり、中国においても白澤と牛との関わりが見えることから、こちらの方が関連があるのではないかと考えられる。

また、『山海経』において、人面と記述されているものはいくつも見られるが、人面だから特に人語を話したり、吉であるというようには見られない。その性格も、「人を食う」ものもあれば、特に何の記述もないものもあるなど様々である。ただ、神であると記述されている存在については人面となつていては多いように見受けられる。これらことから、神または神に準ずる存在が人面であると考えられた可能性はあるのではないだろうか。

(口) 目

目、ひいては視線に力があるということについては、世界中で俗信として認められている。例えば特定の人に見られることによつて災いが訪れるという邪視という考え方、ギリシア神話に見られる目をあわせた者を右に変えてしまうという怪物、またはヒンドゥー教のシヴァ神が持つ第三の目など枚挙に暇がない。さきほど西岡氏があげた方相氏と饕餮についてであるが、方相氏は日本でも追儼の儀式などに登場する。方相氏の役割は疫神の駆逐であり、その際にかぶる仮面は四つ目である。また、饕餮は『春秋左傳』⁽⁴⁹⁾卷十七の文公十八年において、縉雲氏の子として見え、「謂之饕餮。貪_レ財爲_レ饕。貪_レ食爲_レ饕。饕他刀反饕他結反」(割注についてはへ)で表した。)として、財産や食物を貪る者であり、渾沌・窮奇・檮杌と共に四凶とされるが、この饕餮を象つた饕餮紋は目を強調したデザインとなつている。このように、目や視線には力があり、方相氏のように疫神を駆逐することもできるということがいえる。そのような力を持つ目を白澤に附加し、なおかつ顔だけではなく体の両脇腹につけたことで、前だけではなく、多方向に視線を向けて近付いてこようとする魍魎魍魎や疫神を見張る役割をも白澤に附加したということではないだろうか。

(八) 角

角も世界各国において力の象徴ととらえられていた。例えば、「一角獣の角」は万能の秘薬として取引されていた。これは、一角獣の角には解毒作用があるという俗信からきたものである。この俗信は日本においても受け入れられ、例えば近松門左衛門作『平家女護鳥』⁵⁰においては、「彼の唐土もろこしの獨角獸うにかうるといふ獸は。水上の悪毒をおのれが角にてそ、ぎ消し。國民の命を助くれども獵師は恩をわきまへず。獨角獸を殺して角を取る」という記述が見られる。このように、角にも超自然的な力が込められていると受け取る事ができる。また、白澤の背中にも角が生えていることについてだが、同様に背に角が生えているものとしては、「乘黄」という獸がいる。これは『山海経』の海外西経にも見られ、その背に乗れば寿命が二千歳になるといふ。つまり、長寿をもたらすものであり、人間にとつては吉祥である。このように、他の幻獸の影響を受けながら、現在も残されている白澤の姿が形成されていったのではないだろうか。

(二) 宝珠

宝珠は「如意宝珠」のことであり、この珠は、一切の願いが自分の意の如く叶うというもので、仏の徳の象徴ともされ、仏教の如意輪観音はこの如意宝珠と法輪を持って衆生を救うとされている。白澤は文殊菩薩の十吉祥のうちのひとつとして数えられる事もあることから、仏教信仰との関わりも否定できない。また、白澤のもつ辟邪の性質から、悪いものを退ける力や功德の象徴として宝珠を頭上に掲げたとも考えられる。頭上に掲げた理由に関しては、白澤の身体的特徴として、龍のように手に持つことができなかつたことと、凶像として描く時正面からの構図をとる場合、背中よりも頭上においた方がありがたい如意宝珠がより見やすい位置にくるといふ面もあるのではないだろうか。

以上のように白澤の姿が変化した理由について考察してみた。白澤が天下の鬼神達について黄帝に語ったことによつて人々がその害を免れたという故事から、白澤の言葉を話すという部分を取り上げられ人面に変化し、また、辟邪の性質から発展して魑魅魍魎など災いをもたらすもの達を監視するための目がついた。しかもその目は周りを見渡せるように体の両側面につき、前だけでは見尽くせない部分も補完している。また、角についてはその力の大きさを表すために付与されたのではないだろうか。乗黄と混同されたと考えた場合、力だけでなくその吉祥性を顕示するために乗黄のように背中にも角をつけたと考えられる。次に宝珠であるが、これも白澤の持つ力の顕示だと考えられる。これは角のように大きな力を持つということではなく、仏の功德のように、ありがたい力、神聖な力を持っているという意味での力である。辟邪の性質を持たされたことから、悪いものから守護してくれるという人々の意識がこのようなかたちに導いたのではないだろうか。なお、『山海経』に出てくる獸たちについては、角や目がついているから神聖だということはない。このことから、やはり白澤のこれらの性質は日本において定着し、付与されたのではないかと考えられる。

三 三国における白澤という文化の流れ

日・中・琉三国の関係を先行研究や文献からまとめてみると、以下のようになるであろう。すなわち、中国と日本の間では、遣唐使廃止から日明貿易による公的貿易再開までは公的な国交はなかったこと、また、この日明貿易は様々な要因によつて終わりを告げるが、貿易で利益を得ていた者たちは何とか貿易を続ける手段を求めていたこと、中国は海禁政策のため、東アジアにおいての拠点が必要だったこと、そして琉球が中国と日本両方に従属的二重朝貢という形で、両方の文化を受け入れやすい状況にあったことなどである。

以上を踏まえた上で、白澤についてこれまで述べたことをまとめると、白澤は中国で生み出され、黄帝神話と結び付

けられながら伝播していった。その伝播は中国のみにとどまらず、日本や琉球といった周辺諸国にも及んでいた。白澤が妖怪についての豊富な知識を有することや、邪を退けるといふ基本的性格はそのままであったが、その姿は様々に変化していった。描かれた姿としては、大きく分けると獣系と人面獣身のふたつの姿に分けられるが、その地域分布としては、中国には獣系のみ、日本と琉球には、獣系と人面獣身の両方についての資料が見られる。このことから考えてみると、中国には人面獣身系統の白澤がいない以上、琉球における白澤は日本から伝播した可能性が高いといえるのではないだろうか。

琉球の城間清豊の作品である『白澤之図』が掲載されている『沖繩文化の遺宝』²² 第三部琉球絵画の系譜の「自了欽可聖城間清豊」中における「白沢（俗称夢喰）図」解説において、「この画も福州から舶載されたであろう中国絵画の原本があって、これを自了風に臨摹し製作したものと思われる。題賛の字も原本の相違によって、その書風は陶淵明図賛の古様とは異なり、これは明風の書体で文徵明の書を想わせるところがある」として、中国のものを元にして描いたとされている。おそらくこの文章の続きに「これも紙本画で、遺作第一類の描線彩色画に属するものであるが、彩色といっても胡粉の白色以外は使われていない。しかしその胡粉は粉錫（酸化錫）と見られ顔料と共に福建伝の中国技法を伝えたものである」とあることも、そのように判断したことの要因ではないかと考えられる。しかし、この文章の中では参考にしたであろう中国絵画の原本の提示が見られない。また、筆者の見た限りにおいては、中国の資料において人面獣身の系統の白澤が未だ見出せていない。これらのことから考えると、中国の絵画を元として描いたと断定することに対して疑問を呈せざるを得ない。また、一六〇九年に薩摩藩が琉球に侵攻したことで日本と琉球の間の関わりが深まったことよって、日本から人面獣身の白澤が渡ったという可能性は否定できない。城間清豊が生まれたのは琉球侵攻の後であり、また、宮廷画家であったことから、宮廷にもたらされた国外のものを見ることができるとは、一般の人々よりも高かったのではないだろうか。

年代別に見ていくと、白澤の姿の変容の様子がよく分かる。白澤の最初の記述が見られる中国においては、獣として

の白澤のみである一方、日本・琉球においては獸系統と人面獸身系統が混在している。琉球における人面獸身の白澤の初出が十七世紀初めの自了であったならば、日本から人面獸身の白澤が渡った可能性が高い。何故ならば、筆者の見た限りにおいてではあるが、中国の資料で人面獸身の白澤が見られないこと、また、日本においては室町時代の資料の時点で人面獸身であるという記述が見られるということは、江戸時代に白澤が護符として流行する前には既にその姿が確立していたということである。しかも、中国の資料に人面獸身系統が見当たらない以上、日本においてその変化は行われたと考えて良いだろう。平安時代から室町時代を埋める資料がないのが残念だが、日本に伝わってから室町時代に至るまでの間の空白において、何らかの変化が起きたということが推察できる。したがって、琉球に白澤がもともと存在していなかったとしたら、中国から渡ってきた獸系統と日本からもたらされた人面獸身系統の両方が混在していたとしても領ける。また、エドワード・ベルチャーは、宮古島に行った際の記録の中で、白澤を描き写したことに関する記述をしている。その文中で、人々が完全に偶像崇拜者であるとした後に、「彼らの寺は、多くの実例として、道徳上の格言や、時々中国の神のイメージで飾られている。ある機会に、私は人と牛の属性を持つかなりぞっとするような神を描いたきらびやかな絵を模写した。この宮古島の牛神によって、私についてのセレブな多くの読者達は、偶像崇拜から飛び出したそれらの神々の最も重要であるエジプトのアピスをきつと思ひ出し、そしてこれらの珍しい人々の宗教体系をとても独特な形で認識するだろう。この絵の外枠は金色、そして角は黄色である。ヘロドトスが実在を記録している金で包まれた若い雌牛のミイラ、すなわちそれは金の子牛であるが、彼らの父なる神への献身からユダヤ人を誘惑したものであるこれは同じ迷信からの子孫である」と書き記している⁵³。ここで、中国の神の絵の中に白澤が描かれているような記述があるが、当時の欧米の人々の一般的な常識として、日本と中国の神々の区別が明確にしていたのかは少々疑問が残る。また、それを見た場所は「寺(原文 temple)」としか記述されていない。寺と一口にいつても、中国の道教寺院もあれば、仏教寺院もある。宮古島には、筆者が調べた範囲ではあるが、道教寺院が見当たらないが仏教寺院はあることから、ベルチャーが見たのは、仏教寺院ではないかと推察される。更に、中国の白澤資料として現在確認できている

中で、人面獸身として描かれたり記載されている白澤は存在していない。このことから、ベルチャーが見たというこの人面獸身の白澤は、日本から伝わった白澤が仏教寺院に描かれていたものではないかと考えることができるのではないだろうか。また、白澤の形態には獸の形態と人面獸身の形態のものがあるところまで述べてきたが、獸の形態の方にも中国で多く見られる獅子に似た白澤の姿や龍のような姿などいくつかの系統に分かれることもここで述べておく。

以上の事から、白澤における文化の流れとして、中国から日本と琉球に渡った白澤が、日本で独自の变化を遂げ、琉球に渡ったこと、また、現状の資料の数によって、琉球にはあまり定着しなかったのではないかと推測がなせる。今後、更に資料を収集し、論の補強につとめたい。

むすびにかえて

これまで見てきたように、白澤は中国・日本・琉球の三国にわたって資料が存在し、それぞれの国で受容され、時には変化してきた。それは、当地の人々の信仰や習俗に根付くものによってもたらされた変化であり、これを更に深く研究していくことによつて、当時の人々の信仰や、意識を探る手掛かりとなるのではないだろうか。資料について見てみると、発祥の地である中国以上に、日本での資料が豊富である。何故、日本ではこのように広く受け入れられたのだろうか。更に、日本でここまで描かれる姿が変化していったのだろうか。それを知ることが、人々の深層意識を知ることにはつながらないだろうか。また、三国だけでなく、東アジアの他地域にも白澤もしくはそれに類する存在や信仰がなにかについても見ていきたいと考えている。

本論においては、三国における文化の流れとして見てきたが、それぞれの国において白澤がどのように受容されてきたかというのも、別稿を設けて論じるつもりである。また、国や時代が変わっても、白澤は妖怪の害から人間を守る

という基本的性格は他の性格が付与されることはあっても、変化していない。そのような性格を持つ白澤を必要とした人々の思想を今後解明していきたい。

(本稿については、日本民俗学会第59回年会で発表したものに、その後調査を重ね、論を加えたものである。貴重なご意見を頂いた先生方ならびに、資料の閲覧を快く許可下さった諸氏に深謝の意を表したい。)

註

- (1) 四部叢刊諸編縮本二二九「雲笈七籤」四所収 台北台湾商務印書館縮印正統道藏本 六八三頁
- (2) 『山海經圖』胡文煥編 明格致叢書本影印『中國古代版畫叢刊二編』第一輯所収 上海古籍出版社 一九九四年 一四一—一五頁
- (3) 国立国会図書館蔵和装本 印記として山本氏蔵書とあり。
- (4) 国文学研究資料館マイクロ資料 地底叢書七八 所蔵者 宮内庁書陵部
- (5) 原田淑人「瑞獸白澤及び角端に就いて」『東亜古文化研究』所収 一九四一年 座右寶刊行會 三二七—三二九頁
- (6) 牛山佳幸「戸隠二題」『女人禁制』と白沢信仰と』長野市立博物館第三十五回特別展『信濃の山岳信仰』所収 一九九四年 八四—九三頁
- (7) 西岡弘「神獸白沢考」『國學院短期大學紀要』第十六卷所収 一九九八年 三三一—三六六頁
- (8) 立石尚之「白澤のすがた」『民俗のかたちとところ』所収 大島建彦編 二〇〇二年 岩田書院 二九七—三一〇頁
- (9) 高藤晴俊「聖獸「白沢」について—東照宮拝殿杉戸の動物絵—」『大日光』所収 一九八八年 一〇三—一〇五頁
- (10) 佐藤文彦「遙かなる御後絵—甍の琉球絵画—」佐藤文彦 作品社 二〇〇三年 一〇一—一〇五頁
- (11) 四部叢刊初編子部「抱朴子」(一) 内篇卷十三極言 上海商務印書館縮印江南圖書館藏明魯藩刊本 七〇頁
- (12) 注11に同じ。内篇卷十七登涉 九九頁
- (13) 叢書集成初編『珍珠船』陳繼儒纂 沈德先校 中華書局出版發行 一九八五年 北京新一版 七五頁
- (14) 中國通俗小說名著第一集『隋唐演義』上册 主編者 楊家駱 發行所 世界書房 一九六八年再版 一二八—一二九頁

- (15) 『大明会典』李東陽等敕撰 申時行等奉敕重修 江蘇広陵古籍刻印社 一九八九年 一〇五八—一〇五九頁
- (16) 『事物異名録』附……索隱 清・乾隆戊申年(一七八八)刻本 一九七二年
 原輯者 清・厲荃 增纂者 清・關槐 影印者 洪浩培 発行者 新興書局 一五四九頁
- (17) 學基本叢書『西遊記』下 八九回 発行年不詳 吳承恩撰 商務印書館發行 第一一二六號一九四五年 泰子文庫藏 布屋徹吉蒐
 集 底本 『西遊真詮』評者 陳子斌(悟一子)
- (18) 『三才圖會』據上海圖書館藏明萬曆王思義校正本影印 王圻 王思義編集 上海古籍出版社 一九八八年
- (19) 『Hakutaku hi kai zu』白澤避怪圖 (White Marsh Diagram to Repel Ominous Prodiges)』(Asian Medicine) vol. 3, Number 2, 2008)
 二二四頁—二二六頁
 翻訳は筆者による。
- (20) 『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏敦煌文獻』四 俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所 俄羅斯科學院出版社東方文學部上
 海古籍出版社編 上海古籍出版社 俄羅斯科學院出版社東方文學部 一九九三年
 なお、活字本として、『十吉祥講經文』『敦煌變文集新書』所収編著者 潘重規 發行人 邱家敬 一九九四年 天津出版社有限公司
 司 もあげられる。
- (21) 『天地瑞祥志』略説―附けたり、所引の唐令佚文― 『太田晶二郎著作集』第一冊 太田晶二郎 吉川弘文館 一九九二年
 『日本陰陽道書の研究(増補版)』中村璋八 汲古書院 一九八五年初版 二〇〇〇年第三版
 『日本古代漢籍受容の史的研究』水口幹記 汲古書院 二〇〇五年
- (22) 注21 太田氏論文
- (23) 『国史大系』第十三卷所収 一九〇〇年 經濟雜誌社 六五三頁
- (24) 室町末期古写本複製『月菴醉醒記』古典文庫第四一五冊 解説者 鈴木棠三 古典文庫 一九八一年 二一五頁
- (25) 『没後五〇〇年特別展雪舟』に『白釋図』として所収 編集 東京国立博物館 京都国立博物館 發行 毎日新聞社 二〇〇二年
 二九五頁
- (26) 長野県長野市戸隠宝光社宮本旅館藏

- (27) 生活の古典叢書3 『旅行用心集』 八隅蘆庵 一九六二年 解説・注 今井金吾 発行所 八坂書房 四八頁 白澤の絵……七六頁
- (28) 『安政午秋頃痢流行記』 安政五年(一八五八) 九月 金屯道人 天壽堂 国際日本文化センター所蔵
- (29) 『江戸叢書』 卷十二 所収 一九一七年 江戸叢書刊行會 三二〇―三二二頁
- (30) 『十二靈獸圖卷』 玉蟲敏子 『國華』 第二三二號所収 五五―五七頁
- (31) 『和漢三才圖會』 寺島良安 一九〇二年 中外出版社 五七八頁
- (32) 『北斎漫画』 二編 葛飾北斎 文化十二年(一八一五) 四月 角丸屋甚助板
 『北斎漫画』 第一卷 監修・解説 永田生慈 二〇〇二年 東京美術 一二〇頁
- (33) 『怪奇鳥獸図巻』 大陸からやってきた異形の鬼神たち』 監修・解説 伊藤清司 翻刻 磯部祥子 二〇〇一年 工作舎
- (34) 『金華山』 第五十三号 黄金山神社々務所 二〇〇二年四月一日発行また、同第五十四号(二〇〇二年九月一日発行) にも白澤の記事が見える。金華山黄金神社社務所の阿部真幸氏によると、拝殿は明治30年焼失、明治43年再建されているため、彫像は明治43年のものであること、また、彫刻は神社の多くの彫刻を手がけている平田祐延一派の手によるものであることである。
- (35) 『白澤図』 及川直康(号窟堂) 軸装・及川家蔵
 当作品は、所収されている『えさしルネッサンス館 四 及川家四代彩遊記』をいわてルネッサンス・アカデミア副理事長高橋晋氏に頂くと同時に、及川窟堂の曾孫にあられる及川利春氏に画像データを頂く僥倖に恵まれた。
- (36) 『隨題隨記隨刊甲(一) 人面類似集』 編纂者 再生外骨 一九三一年十一月六日緒言 五八頁
- (37) 『いろは引江戸と東京風俗野史』 伊藤晴雨 第五卷信仰と迷信篇 一九三一年
- (38) 『江戸と東京風俗野史』 著者 伊藤晴雨 著作権所有者 伊藤菊 一九六七年 有光書房 二五一頁
 『歴代宝案』 校訂本第一冊 一九九二年 編集 沖縄県立図書館史料編纂室
 校訂和田久徳 発行 沖縄県教育委員会 参考にした『歴代宝案』では、一〇頁「白澤」として注に「澤ノ誤カ」と見える。他の頁では「白澤」という記述で見られる。
- (39) 『使琉球録・夷語夷字附』 據明嘉靖刻本影印 國立北平圖書館善本叢書第一集 上海商務印書館 三六丁才
- (40) 『白澤之図』 城間清豊 『沖縄文化財百科』 第一卷所収 一九八八年 那覇出版社 八八頁

- (41) [Narrative of the voyage of H. M. S. Samarang]
 Captain Sir Edward Belcher 'Narrative of the voyage of H. M. S. Samarang' Reeve, Benham, and Reeve London 1848 国立国会図書館蔵
- (42) 『八重山蔵元絵師画稿集』 石垣市立八重山博物館 一九八五年
- (43) 『白澤の図』 に関しては、残念ながら、著者は未見である。佐藤文彦氏の『遙かなる御後絵―甦る琉球絵画―』（二〇〇三 作品社）に作品が掲載されていたので、そちらを参考にさせて頂いた。
- (44) 拙稿『涉世録』について―『白澤避怪図』にみえる妖怪資料―『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第8号所収 二〇〇七年
- (45) 『今昔百鬼拾遺』安永十年（一七八一）春 遠州屋弥七版
 『鳥山石燕画図百鬼夜行』 監修者 高田衛 編者 稲田篤信 田中直日 一九九七年 国書刊行会 二四七頁
- (46) 佐藤健二「クダンの誕生―話のイコノロジー・序説―」
 『国立歴史民俗博物館研究報告』第五十一集所収 国立歴史民俗博物館 一九九三 七一―一〇二頁
- (47) 『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』唐清凉山大華嚴寺沙門澄觀（七三八―八三九）序述
 『大正新脩大藏經』第三十六卷經疏部四所収 一九七七年再刊 大正新脩大藏經刊行會 二二三頁
- (48) 注20に同じ 四一―三頁
- (49) 『春秋左傳』商務印書館出版 一一―丁
- (50) 『日本名著全集第一期出版江戸文藝部第五卷近松名作集下』所収 一九二七年 日本名著全集刊行會 三四〇頁
- (51) 歴史文化ライブラリー47『アジアの中の琉球王国』高良倉吉 吉川弘文館 一九九八年・『沖繩の歴史と文化』外間守善著 中公新書 一九八六年・『古琉球』伊波普猷著 外間守善校訂 岩波文庫 二〇〇〇年・『日本庶民生活資料集成』第二七卷 三一書房 一九八一年・日本の時代史18『琉球・沖繩史の世界』豊見山和行 吉川弘文館 二〇〇三年・『琉球王国』高良倉吉著 岩波新書 一九九三年・『琉球資料叢書』四・五 名取書店 一九三二年・『琉球の歴史』宮城栄昌 吉川弘文館 一九七七年などを参考にした。
- (52) 『沖繩文化の遺玉』（二分冊）著者 鎌倉芳太郎 一九八二年 岩波書店 写真……二五〇頁 解説……本文篇一八六頁
- (53) 翻訳は筆者による。